

ショートストーリー 第1話 災害前夜編

夕方のニュースが、居間のテレビから淡々と流れていた。

「台風27号は現在も強い勢力を保ったまま北上しています。東北地方では、明日の明け方から災害級の風雨となる恐れがあります。先日の26号に続き、再び激しい雨と風が予測されています。住民の皆さんは、どうか早めの備えを……」

アナウンサーの落ち着いた声とは裏腹に、画面に映る台風の接近を知らせるテロップの赤い警戒色がじわりと不安を煽る。

私は庭に目を向けた。

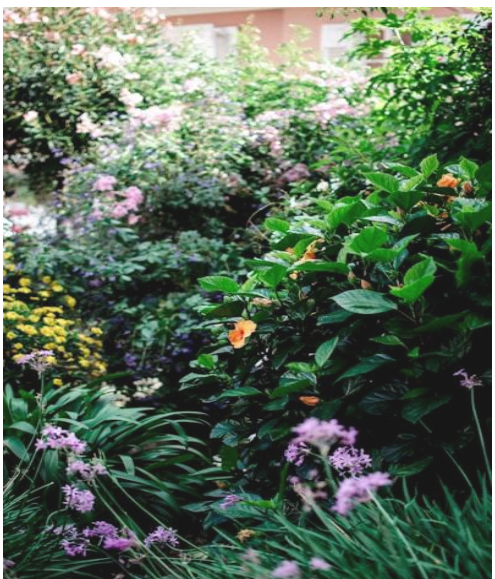
大切にしている庭の草花たちが、8月の今はまだ強い夕陽を受けてはつきりと葉が浮かび上がり、緑のコントラストを際立たせながら、風に揺れている。

さつきまで遠くの田んぼからは刈払い機の音が少し急ぐように響いていた。

「すこし強くなったかしら」

穏やかだった風が、庭の草花全体をまとめて押すように揺らしていく。

その揺れ方の変化に、私はほんの一瞬だけ息を止めた。



そのとき、玄関のドアが勢いよく開く音がした。

「ただいまー！」

娘の声は、いつもより少し早口だった。

自転車をとめて入ってきた娘の頬は赤く、息も少し上がっている。

「部活、中止になっちゃって……！ 台風が来るからって先生が早く帰れて。だから急いで帰ってきたの」

小さなぬいぐるみがついた自転車のカギを靴箱の上に置きながら靴を脱ぐ。

「おかえり。暑かったでしょう」

私は麦茶を差し出した。

娘は一口飲んでから、テレビに目を向ける。

「……ほんとに台風来るんだね。
今年、もう何回も『怖い雨』あったのに」

「この間も降ったばかりなのにね。
ほら、テレビでも言っていたじゃない。最近は何みたいな雨じゃなくて、降るときは一気に怖いぐらい強くなるって……」

「気温が上がると雨の量も増えるらしいし、
なんだか年々、雨の降り方が変わってきている気がするわ」

「道路が川みたいになった日、ほんとに怖かった……」

「またあんなふうになったら、どうしよう」

娘はグラスを握りしめた。

「この前の雨もすごかったでしょう？ あんなふうに一気に降ると、
道路がすぐに水だらけになっちゃうのよね。降り方が異常だって、
テレビでも言っていたし……」

私は庭の草花を見ながら言った。

日が傾いてきただろうか、さっきまではっきりといていたその姿が、
影を濃くし始めている。

ふと空を見上げると、かなりの速さで雲が流れていく。
胸の奥に小さなざわめきが広がった。

そのとき、玄関が再び開いた。

「ただいま」

夫が少し息を切らしながら入ってきた。

「外、急に風が強くなってきた」

私は娘と顔を見合わせた。

娘は「えっ、お父さん、早いね」と小さく驚いた声を出した。
たしかに、いつもよりずっと早い。



「どうしたの？　こんな時間に」

そう聞くと、夫は靴を脱ぎながら、
「電車が止まるっていうからさ。会社でも早めに帰って言われて
急いで戻ってきたんだ」と答えた。

私は娘と顔を見合わせた。

「そんなにひどくなってきたのね……」

夫は頷き、窓の外をちらりと見た。

「最近本当に油断できないよ。ほら、この前も一気に降って道路が
すぐ水だらけになっただろ？　堤防があふれなくても、排水が追いつ
かなくてあふれることがあるんだって。強い台風も増えてるって
ニュースでも言ってたし……とにかく、できること準備しておいた
ほうがいい」

私は庭を見た。

鉢植えも、地植えの草花も、風に揺れながら小さく身をすくめてい
るように見えた。

「……この子たち、家の中に入れたほうがいいわね。」

鉢植えはなんとか全部。」

「そうだな。また水が来るかもしれないし」

夫が小さく頷く。

夜の気配が静かに強まっているなか、風ははつきりと音を立て始め
ている。

「……怖いけど。家族でちゃんと準備すれば、きっと大丈夫よね」
娘が言うと、私はそっと肩に手を置いた。

「ええ。大丈夫よ」

その瞬間、家の外で風がひととき強く吹き、庭の木々がざわりと揺
れた。

暗闇に押されてかすかに残る夕日の最後の一筋が消える。
静かに、『嵐』の気配が忍び寄っていた。

